

佳作

父から学んだこと

安井 紫乃さん

父は大変、我慢強い人だった。「頭が痛い。お腹が痛い。」などと聞いたことがない。

自営業で理容店を営んでいた。母と二人で。母が体調が悪くて寝込んでいる時も、一人で仕事をしていた。

父が定休日以外で、休んでいるのは見たことがない。そんな父の貧血が、ひどくなり、店の定休日に病院へ行き、血液検査をした。

立って、仕事をしていたのが不思議なほど貧血は、ひどくなっていた。

検査結果は、まさかの「急性骨髄性白血病」で、すぐに遠くの大きな病院へ入院が決まった。医師からは、なんと「余命三ヶ月です。」と宣告された。

父は、仕事ばかりしていて、健康診断や、人間ドックなど一度も受けたことがなかった。

中学校を卒業してすぐに家を出て、住み込みで働きながら理容学校へ行かせてもらった。

当時は、住み込みで働かせていただいている家の赤ちゃんのオムツを洗濯したり、交換したり理容の仕事以外のことも、していたそう。辞めていく先輩もいる中で、父は一人前になるまでは。と我慢強く、五年間、働き学費も返したそう。

四十五歳になるまで、ずっと働き通しの人生だった。もしかしたら、貧血は、もっと以前から、あったのかも知れない。

最後のお客様は、お寺の住職だった。私が、まだ生まれる前からの長年の常連さんだ。

「このお店が、なくなったら、ワシはどこに髪を切りに行けばいいのか……。」と言ってくれた。住職が帰ると、父は店を閉め、シャッターをおろした。

その後、母を助手席に、私を後ろに乗せ、父は買ったばかりの新車を運転し、母の実家や母の兄弟六人の家、一軒ずつ回った。

父は一人っ子で、両親は早くに、それぞれ肺癌と大腸癌で他界していた。

父が運転するのは、これが最後となった。まず母の実家へ行き、まだ元気なお爺さん、お婆さんに「妻と娘を残し、自分が先に逝くことをお許してください。私は入院しますが、お見舞いには、来ないでください。妻と娘のことを、どうか見守ってやってください。」と言って、頭を深く下げた。

兄弟六人の家にも一軒ずつ回り、同じセリフを言った。その姿は、覚悟を決めた武士のようであった。母は隣でずっと泣いていた。

父は運転中も一滴の涙も流さなかった。その後、入院の準備をして、母と電車で病院へ向かった。

皮肉にも、父が念願のマイホーム完成間近のことだった。父は、この家に住むことを誰より楽しみにしていた。母は背が低いので、母の身長に合わせたキッチン。キッチンの下からは温風が出た。

一階が店舗で、二階にキッチンとお風呂。三階は、寝室。ソファーや、父と母のダブルベッド。ここに父が眠ることは、なかった。

父は、この新しい店で父と母と私と三人で理容店をできることを楽しみにしていた。

無菌室に入院し、抗癌剤の副作用で髪が、抜けた。母がバリカンで父を丸坊主にした。

いつも帽子をかぶっていた。眉毛もまつ毛も抜けて、すぐに、痩せ細っていった。

私は、その頃、大学進学を諦め、理容専門学校に通っていた。丁度、母が席を外した時、「お父さんが、店できなくなったら、私とお母さんじゃ、理容店できないよ。」と言うと、父は「お前のことなど知るか。もう二度とここへ来るな。今すぐ出て行け。」と突然、怒鳴られた。私は、帰りの電車で飛び乗ると、初めて人目もはばからず号泣した。

父は、食べ物を受け付けず吐いてばかり。高熱が続き、トイレへも立って行けず、母が尿をとって捨てていたそうだ。痛み止めのモルヒネも効かず、体中、痛くて苦しんでいたそうだ。やがて意識がなくなり私に母から、「すぐに病院に来て。」と電話があった。

私は、父の言葉を思い出し、わざと遅れて行った。父は、すでに死んでいた。

二ヶ月、もたなかった。父の新車は、親戚のおじさんに買ってもらった。

この後、母と私は、毎年、健康診断や子宮癌の検診などに行くようになった。

母は「糖尿病予備軍」だとわかった。糖尿病になってしまったら大変なので食事に気をつけたり運動したりして、正常値になった。

やはり健康診断に行くことは、大事なのだと、父が教えてくれた気がする。

我慢せず、異変を感じたら、すぐに病院へ行くことも大切だ。もしかしたら、予防できるかもしれない。

命あつての物種だ。